

夏

草々にかこまれて あなたの顔はせまつて来た
おしろいが日に浮かんで 日がしきりに 照りつけた
怒つてゐる事も 忘れたやうに 二人は争つて
それから 僕は だまつたまま あなたを 泣かしといた
夕方の風が来て ほとりに ふと 螢草を
あなたは 僕をふりかえつて ほほ笑んだ
だけれど 星が出た頃まで 僕は答へなかつた